

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第133回

学生とメディアと一緒に、OSS開発でシビックテックにチャレンジする

●武貞 真未(たけさだ まみ) [Twitter @mamisada](https://twitter.com/mamisada)

Civictech Challenge Cup U-22 (CCC U-22) とは

CCC U-22^{注1}は、学生が運営し、学生が参加する、シビックテックをテーマとしたプロトタイプ開発コンテストです。2020年、当時北海道に住んでいた高専生から「休校や移動制限で課外活動もできず、進学先や進路を決めるためのオープンキャンパスやインターンにも行けなくなった同級生が困っている。コロナ禍でも限られた学生の時間を充実したものにするにはできないか」と投げかけられ、それに賛同した有志が協働する形で企画運営が始まりました。

単なる開発コンテストやハッカソンイベントとは違って、プロトタイプングの手法やチーム開発の進め方などを学びながら学生同士が交流し、社会人からのメンタリングやフィードバックを受けながら開発実績を積めるように、開発前後のサポートも行っています。若年層の学習機会・就職機会の減少という課題の解決を目指すのが特徴です。これまでに累計450名以上の学生のみなさんに参加していただきました。

今年度(2022年度)は、東京・神奈川・茨城・新潟・アメリカに暮らす有志学生が運営に取り組んできました。そのプロセスや結果、そしてそこから^{でんぱ}伝播しているチャレンジなどについて紹介します。

注1 <https://www.code4japan.org/activity/challenge-cup>

学生シビックハッカーの活躍

高専生や大学生が多くプロジェクトやイベントに参加するようになったのは、2020年3月の新型コロナウイルス感染症対策サイトが東京都から始まり、全国各地の都道府県・市区町村で地域版が開発されるようになったタイミングでした。北海道版や三重県版を高専生が開発したことが本人たちのQiita記事^{注2}やTwitterなどで共有されたことから、山口県などを含めた他地域の若い世代が呼応する形で動き始め、各地の高専生・大学生エンジニアがこのプロジェクトからシビックテックに触れていくことになりました。

学生の、学生による、学生のためのシビックテック

上記のコロナ禍でのシビックテックの流れでコミュニティに集まった複数名の学生が、CCC U-22の立ち上げメンバーとなりました。当初は「学生の、学生による、学生のための」というキーワードをプロジェクトチーム内で多用していたことから、「学生による、と掲げているなら、企業協賛の依頼メールやプレゼンテーションも直接自分の言葉で伝えよう」「イベントに登壇してほしい人にも自分でものしに行こう」と能動的なアクションが積み重なり、イベントの企画運営、協賛企業への依頼・報告、参加者対応などを学生が主体的に行っていく文化がで

注2 https://qiita.com/FPC_COMMUNITY/items/b9cc072813dc2231b2b2
東京都新型コロナウイルス対策サイトへの貢献方法を解説しています。

きあがっていきました。これは、Code for Japanのビジョンにある「ともに考え、ともに作る社会」や、頻繁に筆者たちが口にする「手を動かそう」を実践し、その文化をさらに進化させてくれた学生たちの功績です(写真1)。

学生主体で運営する必要性

イベント運営の専門家にお任せしたほうが、参加者に対して円滑かつ完璧なコミュニケーションが取れるかもしれません。しかしながら、シビックテックのもつ性質としての「ともに考える」「ともに作る」を参加者のみなさんに体感してもらうには、「運営と参加の学生が双方に働きかけながら、一緒に考え、一緒につくっていくことから生まれる関係性や体験が欠かせない」と筆者たちは考えています。そのため、毎年進学・就職などで入れ替わりながらも、学生主体であることを変えずに進めています。

協賛企業のみなさんも、学生が企画を考え実行するプロセス自体に共感し、一緒に応援してくださっているから、という理由もあります。実際、学生が自分の言葉で伝えるからこそ、毎年協賛企業のみなさんが運営メンバーをバイネームで覚えてくださったり、卒業後も気にかけてくださったりするような関係性の構築につながっていると感じています。

それに加えて、筆者が学部生だったころに参加したハッカソンやコンテストで、この要素から生まれるものを味わったから次世代のみなさんにも提供していきたいという、個人的な思いもあります。当時、筆者が参加した学生が運営するイベントの多くは、連絡や運営、トラブル対応などにあいまいさや慌ただしさがありました。そんな「学生らしさ」の大半を許容できたのは、同じ立場である学生として「お互い様」だったからです。だからこそ、コミュニケーションからイベント運営まできちんと用意された、完成度の高い場に出会うと「同じ学生なのにすごい」と、大人が用意したイベントの完成度の高さに圧倒されるときとは異なる高揚感を得たことを鮮明に覚えています。もともと自分より経験値もスキルもあるとわかっている相手からあらためてその強さを見せつけられるよりも、同じ目線・立場でいる

◆写真1 運営チームの集合写真(2021年デジタル社会推進賞の「デジタルの日」奨励賞を受賞しました)



と感じていた人たちのプロフェッショナルな姿勢を目の当たりにするほうがインパクトが強く、「自分にもできるかもしれない」という親近感と同時に「もっとチャレンジしよう」という刺激し合える関係性も生まれるのではないかと考え、またそれを願っています。

社会のボーダーを越えていく

今の10代、20代は、生まれたときからPCやスマホであらゆるコンテンツにアクセスでき、個々に選択を委ねられた、混沌とした社会こんとんで育っています。だからこそ、多様性をとらえる力や、自分の興味関心領域に向かって探求していく力、課題に対して主体的に取り組んでいく姿勢を大人以上に持っている人も少なくありません。彼らを「学生」「若者」とラベリングし、「すごい」「負けちゃいけない」とただ感嘆するだけではなく、ともに考えともにアクションしていくために、彼らとの間にボーダーを設けず、対等な立場で対話できるような関わり方を心がけたり、実際にプロジェクトと一緒に取り組んでみたり、大人のほうが意識的に越境していかなければいけないのではと感じています。

「多様性を受け入れる」「ボーダレス」「フラットな社会」など、耳触りのいい言葉があふれている現代において、局所的な振る舞いの是非を問うたり、マイノリティへの理解があると自負してしまうがゆえに、無意識的な自分の振る舞いの間違いに気づけなくしてしまったりするシーンを見かけることが多



く、それはときとして時代と逆行しているのではと感じることすらあります。日本で暮らしていると、日本語を話すこと、日本人であることは国内では「当たり前」だとされすぎているがゆえに、多様性という急に言語や人種の違いに飛びついてしまうことも少なくありません。

私たちがシビックテックで市民の暮らしや地域のまちづくり、社会課題へのアプローチに動くとき、もっと手前にある、そして当たり前すぎて忘れている、年齢や性別、属性の違いに対して私たちが無意識的に受け入れ、自分も発してしまっているかもしれないアンコンシャスバイアスに意識を向けながら、活動していくことが必要なかもしれません。

公共メディアとの コラボレーション

NHK内部でオープンデータ／オープンソースやデジタル活用を推進している有志エンジニアの方々とのコラボレーションで、昨年度から「NHKハッカソン」を開催しています^{注3}(図1)。初回の教育編に続いて、今年度は「防災編」と題して、地図データなどを組み合わせたプロトタイプにチャレンジし

注3 <https://www.code4japan.org/news/nhkhackathon2022>

◆ 図1 オンライン開催のNHKハッカソンの様子



ました。

また、今年度はNHKの別チームのみなさんとCCC U-22の枠組みを参考にしながら「シビックテックチャレンジ子育て編」という年齢制限を設けない開発イベントを実施し、ハッカソンとその後のプロジェクトチームの活動から生まれたプロトタイプとその開発プロセスが、NHKスペシャル「つながれ！チエノワ」の番組内で紹介されました。この取り組みでは、数理情報学を専門とする方が研究されている「公平な配分のアルゴリズム」を起点とした「パートナー間の家事分担を可視化するツール」などが開発されました。

メディアのデータ共有から広がる オープンデータ

NHKハッカソンの始まりも、実は新型コロナウイルス感染症対策サイトと同じころ、Code for Japanが毎月開催しているプロジェクト持ち込み型ハッカソン「ソーシャルハックデー」^{注4}に参加した有志メンバーから「NHK for Schoolのデータを活用して、休校期間を自宅などで過ごしている子どもたちの役に立てないか」と相談されたことが最初のきっかけでした。教育・子育てに関心を持つ参加者のみなさんと一緒にリサーチする中で、学校から家庭や児童に対してプリント配布で学習計画が共有されていること、それらにQRコードなどがなく、端末で自ら検索しなければ動画コンテンツなどにたどり着けない状況にあること、子どもが占有できるPCがある家庭は少なく、スマホ端末からのアクセスを想定する必要があること、などが判明しました。そこで、スマホから簡単に動画コンテンツにアクセスできるオンライン時間割表を開発するとともに、NHKのみなさんにNHK for SchoolのAPIやデータ提供に取り組んでいただき、「おうちで時間割」が生まれました^{注5}(図2)。

注4 <https://www.code4japan.org/case/socialhackday>

注5 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/0000000024_000039198.html

この開発に参加していた学生エンジニアから出てきた言葉が、CCC U-22立ち上げのきっかけとなった問題提起でもありました。

◆ 図2 おうちで時間割



オープンデータをともにつくる

社内共有用にもともと構築されていたデータベースから、外部に公開できるように成形したり確認したりすることは、持っているデータが多ければ多いほど、地道で大変な作業です。また、大切な知財の一部をオープン化するということはリスクとしてとらえられることも多く、合意してもらうことも簡単ではありません。オープンにしたからといって、すぐに直接的なリターンがあるわけでもないところも、この動きを難しくさせています。

しかし、それぞれの組織や自治体が少しずつ公開すべきデータのオープン化にチャレンジし、その積み重ねが広がっていけば、オープンデータを活用して分析したり、開発したりできるものを増やし、より市民が企業や研究機関などと連携しながら地域のまちづくりや社会課題へのアプローチにチャレンジしていくことができます。

NHKハッカソン運営チームのみなさんは「データを活用できる形にして社会に届け、公共メディアとしての自分たちをアップデートしていこう」という強い信念とそれを具現化するための推進力を持ち合わせているので、一緒に活動をしているといつも元気をもらいます。社内外でムーブメントを起こしながら励まし合える仲間を増やしていければ、点滴^{てんてきせき}で社会に寄与することができるのではないかと感じています。

NHKさん以外にも、自治体や企業の方々と一緒にハッカソンやプロトタイプ開発の場をつくっていく機会が増えてきています。CCC U-22のように対

象年齢を絞ったり、NHKハッカソンのようにテーマ・興味領域を特化したりしながら、それらを掛け合わせていくことで相乗効果が生まれることを期待しています。さらにシチズンサイエンス⁶の枠組みも融合し、プロトタイピングの前後にデータに基づいた仮説構築と実証実験の効果測定なども実現できれば、社会

全体で仮説検証しながら自分たちの手で社会をアップデートするという「シビックテック」な文化をより多くの方々と共有していくことができるのではないかと、ワクワクしています。

社会と一緒にアップデートしませんか？

これまでのCCC U-22はコロナ禍の学生のための救済措置のような側面を持っていましたが、2023年からは非常時のプログラムとしてではなく、次世代を担う学生のみなさんとシビックテックを推進し、社会をアップデートしていくための取り組みとして、中長期的に開催できるよう、バージョンアップにチャレンジしようと考えています。

感染状況もまだ予断を許さぬ状況にあります。国際情勢も国内も含め、人々を悩ませる問題は山積んでいます。目を覆いたくなるような出来事もたくさんありますし、心が擦り減るような瞬間もあります。無力感に苛まれる場面もありますが、自分たちのスキルを使って、対話を積み重ね、少しずつでも社会を自分たちの手でアップデートしていくことができれば、そのプロセスや仲間の存在に救われることもありますし、その過程の中で少しずつ糸口がつかめてくるかもしれません。「ソーシャルハックデー」にも、一歩踏み出して遊びに来ていただけたら嬉しいです。一緒に手を動かしながら、悩んだり喜んだりしましょう。SD

注6 職業研究者ではない一般市民が、参加あるいは主導する研究活動のこと。